

李善の「上文選注表」について

富 永 一 登

李善の『文選』注に対する評価については、敢えて贅言を要するまでもないが、『新唐書』文芸伝の、李善に対する評価はあまり高いものではない。官界で活躍し、文章家としても著名であった息子李邕の付録として扱われており、その冒頭でも「李邕、字は泰和、揚州江都の人なり。父善、雅行有りて、淹く古今を貫けども、辞を属る能はず。故に人 書籠と号す」と記す。「書籠」というのは、書籍を入れる竹製のかごの意であり、それだけなら博学を評することになるのだが、実はこのことばは次のような謂れを持っている。

時に右丞傅迪、好んで広く書を読むも、其の義を解せず。柳は唯だ『老子』を読むのみ。迪 毎に之を軽んず。柳云ふ、「卿は書を読むこと多しと雖も、而れども解する所無し。書籠と謂ふべし」と。時人 其の言を重んず。

(『晋書』卷六一劉柳伝)

これは、梁・沈約の撰とも伝えられる『俗説』(『太平御覧』卷六一六引)の話と『晋書』が転載したものと思われる。傅迪というのは、宋の武帝劉裕に仕えた著名な文人傅亮の兄である(『宋書』卷四三)。その傅迪が、読書量が多いただけで内容を理解していないというので、劉柳から「書籠」と評されている。傅迪兄弟と李善父子の関係が同様であるのも共通している。

では、李善は、本当に「辞を属る能はざる」人物であったのであろうか。確かに、多くの文章を残している李邕に比べ、李善の文章は「上文選注表」のみで、他には何の詩文も残されてはいない。しかし、その「上文選注表」を讀

めば、「辞を属る能はず」とは全く逆の能文の才が窺われる。高歩瀛も『文選李注義疏』で、

『新伝』の書籠の号に至りては、殊に信ずるに足らず。善の文、多くは見えざれども、即ち此の表を以て之を
 観れば、閔括瑰麗なり。之を四傑・崔・李の諸家に較ぶるも、殊に愧色無し。則ち謂ふ所の「辞を属る能はず」
 は、殊に弁を待たず。

と、その文章が初唐の四傑（盧照鄰・駱賓王・王勃・楊炯）や杜審言・蘇味道と共に「文章四友」と称された崔融・李嶠と遜色がないという。^①そして、高氏は「上文選注表」中の言葉の典故を指摘している。ただ、その後、この文章に対する十分な読解はなされていまいように思われる。そこで、本稿では、「上文選注表」の注解を試み、李善の駢文創作の才を考察してみたい。

ところで、『文選』注を上表した時期について二説がある。一つは、『文選』に付されている「上文選注表」に見える「顯慶三年（六五八）九月十七日文林郎守太子右内率府録事參軍事崇賢館直学士臣李善上表」^②であり、一つは、『唐会要』卷三六に見られる「顯慶六年（六六一、二月に改元され龍朔元年となる）正月二十七日、右内率府録事參軍崇賢館直学士李善、上注『文選』六十卷、藏于秘府」という記事である。^③どのような事情で、この二つの記録が残されているのか、不明であるが、屈守元氏は、李善が『文選注』を上表してから、三年たって始めて正式の詔によって秘府に取められたのだという。^④なお、その時の官職は次のようなものである。「文林郎」は、実務を伴わない従九品上の散官で位を示すために使われる（『大唐六典』卷二尚書省吏部）。「守」は官職の方が位より高いことを示す。官吏としての位である「文林郎」（従九品上）より、実務の「太子右内率府録事參軍事」（正九品上）が品階が高い。「太子右内率府」は、皇太子を護衛する東宮の役所で、「録事參軍事」はその文書管理などを担当する（『旧唐書』職官志三、『新唐書』百官志四上、『大唐六典』卷二八）。時の太子は、高宗の第五子弘（則天武后の子で顯慶元年四歳で太子となり上元二年に薨す）であった。「崇賢館直学士」も東宮の官である。崇賢館は貞観十三年に置かれ、学士・直

学士などが東宮の経籍圖書を整理し諸生を教授するのを任とし、上元二年以降は太子李賢の名を避けて崇文館と改名されている（『旧唐書』職官志三、『新唐書』百官志四上、『大唐六典』卷二六）。

以下、「上文選注表」を六段に分けて読解し、李善の駢文創作を分析してみる。⁽⁵⁾ なお、底本には胡刻本を使用した。

一 臣善言、竊以道光九野、縹景緯以照臨。德載八挺、麗山川以錯峙。垂象之文斯著、含章之義聿宣。協人靈以取則、基化成而自遠。（九條本、上野氏藏鈔本協作叶。）

臣善言す。竊に以んみれば、道は九野に光ぎ、景緯を縹りて以て照臨す。徳は八挺を載せて、山川に麗きて以て錯り峙てり。象を垂るるの文。斯に著はれ、章を含むの義。聿に宣べり。人靈に協ひて以て則を取り、化成に基して自づから遠し。

【注解】○道光九野 天道が宇宙全体を照らしていることをいう。「道光」は、『周易』益卦象伝に「上よりして下になり、其の道大いに光く」とある。「九野」は、天を九つに分けその全体をいう。『呂氏春秋』有始覽と『淮南子』天文訓に見える。○縹景緯 太陽と星を光で飾ること。『文選』卷四六王融「三月三日曲水詩序」の「揆景緯以裁基」李善注に「景は日なり。緯は星なり」という。○照臨 上から照らす意。『毛詩』邶風日月に「日や月や、下土を照臨す」とある。○徳載八挺 道徳が地上の四方八方に満ちていること。「挺」は、地の果て。『文選』卷四八司馬相如「封禪文」の「下沂八挺」孟康注に「挺は、益挺の若し。地の八際なり」という。○麗山川以錯峙 道徳が地上の事物に付着して林立していること。「麗」は、付着の意。『周易』離卦象伝に「百穀草木 土に麗く」とある。九条本・明州本・慶安本では、「山川を麗しくして」と訓じている。今、高氏注に従う。「錯峙」は、混じり立つ意。『晋書』天文志上に「衆星列布し、体は地に生じ、精は天に成る。列居錯峙し、各おの属する攸有り」とある。○垂象之文 天が吉凶を示す自然現象。『周易』繫辭伝下に、「天 象を垂れ、吉凶を見はし、聖人 之に象る」とある。○含章之

義 美德を内包した正しい道。『周易』坤卦六三爻辭に「章を含む貞にすべし」とある。○協人靈以取則 天文が人文に合致し、よき手本とすることができるようになったという。「人靈」は、万物の靈長である人間をいう。『尚書』泰誓上に、「惟れ天地は万物の父母、惟れ人は万物の靈なり」とあり、孔安国伝に「靈は神なり。天地の生む所、惟だ人を貴しと為す」という。「取則」は、手本とする意。『文選』卷一七「文賦」に、「斧を操りて柯を伐るに至りては、則を取る事遠からずと雖も、夫の手に随ふの変の若きは、良に辞を以て逮び難し」とある。○基化成而自遠 教化を達成する本となって自然と遠くにまで及んだという意。「化成」は、天下を教化し風俗を完成させること。『周易』恒卦象伝に「聖人は其の道に久しくして、天下化成す」、賁卦象伝に「天文を觀て、以て時の変を察し、人文を觀て、以て天下を化成す」とあり、後者は昭明太子の「文選序」にも引用されている。「自遠」を、明州本・慶安本では、「遠きより」と訓じている。今は、『唐代文選』の「自然及遠」と解するのに従う。

第一段は、主に『周易』を典拠として天道の徳が天地に行き渡り、天文・自然現象が現れ、それに叶った人文によって風俗が教化され完成したことをいう。

二 故義繩之前、飛葛天之浩唱。娒簧之後、揆叢雲之奧詞。步驟分途、星躔殊建。球鍾愈暢①、舞詠方滋。楚國詞人、御蘭芬於絕代。漢朝才子、綜鞞輓於遙年。虛玄流正始之音、氣質馳建安之體。長離北度②、騰雅詠於圭陰。化龍東驚、煽風流於江左。(①上野氏藏鈔本球作鉢。②九條本、上野氏藏鈔本度作上。)

故に義繩の前には、葛天の浩唱を飛ばし、娒簧の後には、叢雲の奥詞を揆かす。步驟 途を分ち、星躔 建を殊にす。球鍾愈いよ暢び、舞詠方に滋し。楚國の詞人は、蘭芬を絶代に御む。漢朝の才子は、鞞輓を遙年に綜ぶ。虚玄は正始の音を流し、氣質は建安の体を馳す。長離 北に度り、雅詠を圭陰に騰ぐ。化龍 東に驚せて、風流を江左に煽んにす。

【注解】○義繩之前 伏羲氏が繩を結んで約束事とした結繩の治以前。『周易』繫辭伝下に「上古は繩を結んで治まされり。後世の聖人これに易ふるに書契を以てす」とあり、許慎の『說文解字』叙には「神農氏に及ぶまで、繩を結んで治を為して、其の事を統ぶ」という。また、『文選』卷三五「七命」に「羲皇の繩を解き、陶唐の象を錯すく」とあり、その李善注は繫辭伝下を引く。ただ、昭明太子の「文選序」では、「伏羲氏の天下に王たるに逮ぶや、始めて八卦を画き、書契を造りて、以て結繩の政に代ふ。是に由りて文籍生ず」（これは、繫辭伝下の「古者包犧氏の天下に王たるや、仰いでは象を天に觀、俯しては法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取り、是に於いて始めて八卦を作り、以て神明の徳を通じ、以て万物の情を類す」に基づく）といい、李善の考えとは違ふ。○葛天之浩唱 「葛天」は、伝説上の君主葛天氏。伏羲氏の前に無為の治が行われていた理想的純朴な世の君主。『呂氏春秋』仲夏紀古楽篇に「昔、葛天氏の楽、三人牛尾を操り、足を投じて以て八闋を歌ふ」とあり、『文選』卷八「上林賦」にも、「葛天氏の歌を聴く。千人唱ひ、万人和す。山陵之が為に震動し、川谷之が為に蕩波す」という。「浩唱」は、声高らかに歌う。『楚辭』九歌東皇太一に「竽瑟を陳ねて浩倡す」、九歌少司命に「風に臨んで恍として浩歌す」とある。○媧簧之後 「媧」は、女媧氏。「簧」は、笛の一種。笙簧。『礼記』明堂位に「女媧の笙簧」とあり、鄭玄注引「世本」作篇に「女媧笙簧を作る」という。○揆叢雲之奥詞 「揆」は、輝く意。『文選』卷四「蜀都賦」に、「藻を揜べ、天庭に揆かす」とある。「叢雲」は、群がり集まる雲。ここでは、舜帝の作った「卿雲歌」をさす。『太平御覽』卷八引『尚書大伝』に、「舜賓客と為り、禹主人と為り、百工相和して卿雲を歌ふ。時に于いて八風循通し、卿雲叢叢たり」という。『芸文類聚』卷四三に引く「卿雲歌」は、「卿雲爛兮、礼纒纒兮。日月光華、且或且兮」というものである。昭明太子の「文選序」では、伏羲氏の前には「世は質に民は淳くして、斯の文 未だ作らず」と言っていて、李善が葛天氏や舜の歌があるとするのと違ふ。沈約の『宋書』謝靈運伝論では、「虞夏以前、遺文覩えずと雖も、氣を稟け靈を懷き、理として或いは異なる無し。然らば則ち歌詠の興る所は、宜しく生民より始

まるべきなり」といい、『文心雕龍』明詩篇には「昔葛天氏の樂辭、玄鳥曲に在り。黃帝の雲門、理として空絃ならず。堯に至りて大唐の歌有り、舜は南風の詩を造る」という。李善は、これらの考えによっている。○步驟分途 節奏に緩急のあること。賈誼『新書』輔佐篇に「步驟徐疾の節」とある。○星躔殊建 「星躔」は、日月星辰の運行の軌道。『方言』卷一二に「日運を躔と為す」とあり、梁・武帝の「閭闔篇」に「長旗 月窟を掃き、鳳迹 星躔を輾ぐる」（『樂府詩集』卷六四）という。「建」は、たつ、定めるの意。○球鐘 樂器。『尚書』益稷孔安國伝に、「球は、玉磬なり」という。「鐘」は、鐘と通ず。○舞詠 舞踊と歌唱。『文選』卷四六顔延之「三月三日曲水詩序」に「鐘石畢く舞詠の情を陳ぬるも一成らず」とある。○楚國詞人 屈原をさす。○御蘭芬於絶代 「蘭芬」は、蘭の芳香の意で、『文選』卷六左思「魏都賦」に「信陵の名、蘭芬の若し」とある。ここでは、屈原の「離騷」などの文をさす。九条本の傍注に「香草、以て文章に譬ふるなり」という。「絶代」は、遠くかけ離れた時代。晋・郭璞の『爾雅』序に、「絶代の離詞を摠ぶ」という。○漢朝才子 司馬相如、揚雄などの賦家をいう。○綜鞞脱於遙年 「鞞脱」は、大帯と手ぬぐいの意。ここでは、漢代の賦家による言葉の彫琢をいう。九条本の傍注に「以て文章に比ふるなり」という。揚雄『法言』寡見篇に「今の学や、独だ之が華藻を為すのみに非らず、又従ひて其の鞞脱に繡す」とあり、李軌注に「鞞は、大帯なり。脱は、佩巾なり」という。○虚玄流正始之音 魏晋の際、正始年間（二四〇―二四八）を中心に、何晏・王弼などによって『老子』『莊子』『易経』に基づく玄学清談が流行したことをいう。『晋書』王衍伝に、「魏の正始中、何晏・王弼等 老莊を祖述して論を立て、以為へらく天地万物は皆無為を以て本と為し、……」という。「正始之音」という語は、『世説新語』文学篇・賞誉篇などに見える。○氣質馳建安之体 後漢末の建安年間（一九六―二一九）、曹操父子や王粲などの建安七子によって展開された文学活動をいう。「氣質」は、ここでは詩文の個性、風格をいう。『文選』卷五〇『宋書』謝靈運伝論に、「子建、仲宣氣質を以て体と為す」という。○長離 北度 陸機が呉から北上して洛陽に入ったことをいう。「長離」は、靈鳥の名。『文選』卷二四潘岳「為賈謐作贈陸機」

詩に「婉婉たる長離、江を凌りて翔る。長離は云れ誰ぞ、咨爾陸生なり」とあり、李善注に「漢書（礼楽志）に曰く、長麗前に抜き、光耀明らかなり。臣瓚曰く、長離、靈鳥なり。離と麗古字通ず」という。司馬相如「大人賦」にも「長離を前にして喬皇を後にす」とある。○騰雅詠於圭陰 陸機が洛陽で優れた詩文を作ったことをいう。「圭陰」は、洛陽をさす。古代、土圭（日影を測る道具）で地の中心を漢の潁川郡陽城県（河南省登封県）とし（『周礼』大司徒鄭司農注）、洛陽はその西にあるので、『周礼』大司徒の「日西則景朝多陰」と合わせて、洛陽を「圭陰」とした。他に用例が見えず、李善の造語と考えられる。○化龍東驚 永嘉の乱で晋朝の人々が江東に逃れたことをいう。「化龍」は、晋の元帝司馬睿が江東の建康で晋王朝（東晋）を再興したことをいう。『芸文類聚』卷一三引『晋陽秋』に「太安中、童謡に曰く、五馬浮かびて江を渡り、一馬化して龍と為ると。永嘉の大乱、王室淪覆す。唯だ琅琊（司馬睿）・西陽・汝南・南頓・彭城の五王のみ済るを獲たり。是に至りて中宗（元帝司馬睿の廟号）登祚す」（『晋書』元帝紀にもこの童謡のことを記す）。○煽風流於江左 江東の地で詩歌が盛んになった。沈約の『宋書』謝靈運伝論に「晋の中興に在りて、玄風独り扇んに」といい、『文心雕龍』明詩篇に「江左の篇製、玄風に溺れ」といい、老荘の風が盛んになったというマイナスの評価を下しているが、これは東晋に限っての批評である。ここの李善の「風流」の語は、次の宋代までの文学を広く評価したものと思われるので、沈約の『宋書』謝靈運伝論に「周室既に衰ふるや、風流弥いよ著はる」という詩歌が盛んになった意ととる。

第二段は、主として沈約の『宋書』謝靈運伝論に沿いながら、『文選』編纂までの詩文の変遷の要点を、『文選』の語彙を使い、或いは典故を踏まえた造語を使って述べている。

三 爰逮有梁、宏材彌劬。昭明太子、業膺守器、譽貞問寢。居肅成而講藝、開博望以招賢。奉中葉之詞林、酌前修之筆海。周巡縣嶠、品盈尺之珍。楚望長瀾、搜徑寸之寶①。故撰斯一集、名曰文選。後進英髦、咸資準的②。（①搜、

上野氏藏鈔本作援。慶安本、全唐文作比。②上野氏藏鈔本準作准。」

爰に有梁に逮び、宏材弥いよ劬し。昭明太子、業は守器に膺り、誉は問寝に貞なるにあり。肅成に居て芸を講じ、博望を開きて以て賢を招く。中葉の詞林に奪りて、前修の筆海に酌むは、周巡の縣嶠に、盈尺の珍を品さだめし、楚望の長瀾に、徑寸の宝を搜すがごとし。故に斯の一集を撰し、名づけて文選と曰ふ。後進の英髦、咸準的に資す。

【注解】○宏材弥劬 才氣溢れる詩人たちが多く出現したことをいう。「宏材」は、大いなる才能。「文選」卷四七夏侯湛「東方朔画賛」に「瞻かなる智 宏き材」とある。「劬」は、うるわしい意。「文選」卷二六潘岳「河陽鼎作」詩に「誰か謂はん邑宰は軽しと 令名の劬しからざるを患ふるのみ」とあり、李善注に引く「小爾雅」に「劬は、美なり」という。○業膺守器 昭明太子が皇太子の地位にいたことをいう。「守器」は、宗廟の祭器を守る意で、皇太子を指す。主器ともいう。「周易」序卦伝に「器を主とる者は、長子に若くは莫し」といい、「南齊書」文惠太子伝賛に「方に守器と為り」とある。○誉貞問寝 昭明太子が天子である父に礼節を尽くしたという評判を得たこと。「問寝」は、日常生活の中で父母の安否を常に気にかけて尋ねることで、『礼記』文王世子に「文王の世子たりしとき、王季に朝すること日に三たび、鶏初めて鳴きて服を衣、寝門の外に至り、内豎の御者に問ひて曰く、『今日の安否は何如』と。内豎曰く、『安し』と。文王乃ち喜ぶ」とあるのに基づく。これ以前に用例が見当たらず、李善の造語かと思われる。昭明太子の仁徳について、『梁書』卷八昭明太子伝には「太子性仁孝」「天下皆仁を称す」「太子、仁徳素より著はるれば、薨するに及び、朝野惋憫す。京師の男女、宮門に奔走し、号泣 路に滿つ。四方の氓庶、及び疆徼の民も、喪を聞きて皆慟哭す」と記す。○居肅成而講芸 昭明太子が学問に勤しんだことをいう。「肅成」は、太子が学問をする処。『三國志』魏書文帝紀裴松之注引王沈『魏書』に「帝初め東宮に在り。……諸儒を肅城門内に集め、大義を講論し、侃侃として倦むこと無し」（『太平御覽』卷九三引作「肅成」とある。昭明太子の「同泰僧正講詩」にも「筵を開き肅成を慕ふ」という。「講芸」は、もと六芸（詩・書・礼・楽・易・春秋）を講論する意、学問研究を

行うことをいう。『文選』卷一班固「西都賦」に「六芸を講論し、同異を稽（合はしむ）、卷四六顔延之「三月三日曲水詩序」に「文を校し芸を講ずるの官は、遺を内に采る」とある。○開博望以招賢 昭明太子が文人才子を招いたことをいう。「博望」は、漢の太子の宮苑の名。『漢書』卷六三武五子伝に「戻太子拋、元符元年、立ちて皇太子と為る。……冠して宮に就くに及び、上為に博望苑を立て、賓客を通じ、其の好む所に従はしむ」とある。謝朓の「寔に華光殿の曲水に侍り勅を奉じ皇太子の為に作る詩」に「賢を博望に登し、賦を清潭に献ず」という。『梁書』本伝には「才学の士を引き納れ、賞愛して倦むこと無し。恒に自ら篇籍を討論し、或いは学士と古今を商榷す。問には則ち継ぐに文章著述を以てし、率ねて常と為す。時に於いて東宮に書幾ど三万卷有り。名才並びに集まる。文学の盛んなること、晋宋以来、未だ之れ有らざるなり」という。○塞中葉之詞林 「塞」は、取る意。『楚辞』離騷「朝搴阰之木蘭兮」王逸注に「塞、取也」という。「中葉」は、ここでは周秦以来を指し、上古に対していう。『毛詩』商頌長發に「昔中葉に在り」とあり、毛伝に「葉は世なり」という。『文選』卷四左思「蜀都賦」の「中葉に当たりて名を擅にす」、昭明太子「文選序」の「炎漢の中葉より」というのは、いずれも漢の武帝の頃を指す。「詞林」は、集められた多くの詩文をいう。昭明太子「文選序」に「歴く文園を觀、泛く辞林を覽る」、『芸文類聚』卷三一引陸倕「感知己賦」に「学は書府を窮め、文は詞林を究む」、昭明太子「答晋安王書」に「墳史を殺核し、詞林を漁獵す」とある。○酌前修之筆海 「前修」は、前世の賢人。『楚辞』離騷「謇吾夫の前脩に法る」の王逸注に「前脩」を「前世の遠賢」と解している。「筆海」は、「詞林」と同意。林に対して海にたとえる。『論衡』乱龍篇に「劉子駿は漢朝の智囊、筆墨の淵海」とある。『唐代文選』の注釈は、『文心雕龍』の有韻を「文」、無韻を「筆」というのを引き、「筆」を無韻の散文の意とするが、ここでは「詞林」「筆海」ともに有韻無韻の区別なく詩文全体をいうと考える。○周巡縣嶠 「周巡」は、周の穆王の巡征。『穆天子伝』に周の穆王の各地への巡征が記述されている。たとえば卷一に「乃ち昆侖の丘に至り、以て春山の瑤を觀る」とある。「縣嶠」は、長く連なる高い山。下旬の「楚望」と対にして、ここでは北

方の山岳のことをいう。○品盈尺之珍 「品」は、品定めする意。「盈尺之珍」は、直径一尺もある宝玉。『尹文子』大道篇上に「魏の田父に野に耕す者有り。宝玉の径尺なるを得。……其の夜 玉明ひかき、光 一室を照らす」とあり、『文選』巻一「西都賦」李善注に「夜光」の注としてこれを引く。○楚望長瀾 「楚望」は、楚の地をいう。『春秋左氏伝』哀公六年に「江・漢・睢・漳は、楚の望なり」とあるのに基づく。『文選』巻二七顔延之「始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作」詩に、「江漢 楚望を分かつ」とあり、その李善注にも『左氏伝』のこの文を引く。「望」は、山川を祭る意。「長瀾」は、長く連なる波。『爾雅』积水に「大波を瀾と為す」という。ここでは、『左氏伝』にある長江・漢水などを指す。上句の「周巡」と対にして、ここでは南方の川のことをいう。○搜径寸之宝 「径寸之宝」は、直径一寸の宝珠。隋侯の珠について記した『搜神記』巻二〇に「珠 径寸に盈つ」とある。隋侯の珠については、『文選』巻一「西都賦」の「隋侯明月」李善注に詳考がある。以上四句は、珠玉を品定めすることを使得、詩文を選択することにとえる。○後進英髦 後の俊英たち。『文選』巻五四劉峻「弁命論」に「英髦秀達」とあり、李善注は『毛詩』小雅甫田「烝我髦士」毛伝の「髦は、俊なり」を引く。○威資準的 「資準的」は、手本とする意。『文心雕龍』定勢篇に「章・表・奏・議は、則ち典雅を準的とす」とある。

第三段は、昭明太子の伝を踏まえ、経書から小説まで幅広く典故を使得、『文選』編纂について述べている。

四 伏惟陛下、經緯成德、文思垂風。則大居尊、耀三辰之珠璧①。希聲應物、宣六代之雲英。孰可撮壤崇山、導涓宗海②。(①上野氏藏鈔本耀作曜。②上野氏藏鈔本導作道。)

伏して惟おもんみるに陛下は、經緯 徳を成し、文思 風を垂る。大に則り尊に居り、三辰の珠璧を耀かす。希聲物に應じて、六代の雲英を宣ぶ。孰か壤を撮とみて山を崇たかくし、涓を導き海に宗せしむべけんや。

【注解】○陛下 唐の第三代の天子高宗。在位六四九—六八三。○經緯成徳 「經緯」は、天下を治める、治世の意。

『春秋左氏伝』昭公二十九年に「夫れ晋国は將に唐叔の受くる所の法度を守り、以て其の民を經緯せんとす」、『史記』秦始皇本紀に「善く明法を施し、天下を經緯し、永く儀則と爲る」とある。「成徳」は、完成された徳。『周易』乾卦に「君子は成徳を以て行いを爲す」(「君子は徳を成すを以て行いと爲す」とも読む)とある。○文思垂風 「文思」は、『尚書』堯典序に「昔在 帝堯、聡明文思にして、天下に光宅す」、堯典に「勲に放ひて、欽明文思、安んずべきを安んず」とあり、天子を稱賛するのに使われることは、鄭玄注に「天地を經緯す、之を文と謂ひ、慮深く通敏なる、之を思と謂ふ」といい、孔穎達疏に「聡明の神智は、以て天地を經緯すべし、即ち文なり。又神智の運は、深く機謀に敏なり、即ち思なり」という。今この注に従い、「文思」を神智と深謀の意とする。「垂風」は、教えを垂れ、教化すること。『尚書』說命中「威 朕の徳を仰ぐは、時れ乃の風なり」の孔安国伝に「風は、教なり」という。ただ「垂風」の語は用例が見当たらない。○則大居尊 「則大」は、偉大なる天を手本とすること。『論語』泰伯篇に「大なるかな、堯の君たるや。巍巍乎として唯だ天を大なりと爲す。唯だ堯之に則る」とあるのに基づくことばであるが、用例を見ない。「居尊」は、尊位に居ること。『儀礼』喪服伝に「君は、至尊なり」という。○耀三辰之珠璧 日月星辰の光を輝かす。高宗の恩徳を日月星辰の光にたとえてゐる。『周易』乾卦に「夫れ大人は、天地と其の徳を合し、日月と其の明を合す」とある。「三辰」は、日・月・星をいう。『春秋左氏伝』桓公二年「三辰旂旗」杜預注に「三辰は、日月星なり」という。「珠璧」は宝玉であるが、ここでは、光の意。『漢語大詞典』卷四は、李善のこの文を引き、「珠璧」を皓潔な光輝の意に解する。高氏以下の注釈は、『漢書』律歴志上の「日月 合璧の如く、五星 連珠の如し」を引いているので、この句を全ての光が集まったような輝きを放つという意に解するのであろうが、今は取らない。○希声応物 聞こえることのなかったこの上なく偉大なる音楽が世の変化に応じて現れたこと。「希声」は、聴いても聞こえない音。『老子』四一章に「大器は晩成す。大音は希声なり」という。『文選』卷二六顔延之「贈王太常」詩に「宝を蓄ふれば毎に声を希にす、秘すと雖も猶ほ彰はれ徹る」とある。ここでは、下句から考えて『老子』の「大

音」から敷衍して「この上なく偉大なる音楽」の意とする。○宣六代之雲英 聖天子である黄帝・堯・舜・禹・周武王の六代の音楽が、広まったといい、高宗の御代が聖天子の世と同様であると称賛している。六代の楽は、『周礼』春官大司楽に見える。ただ、「雲英」を古楽の意とする用例は見当たらない。或いは、『周礼』の賈公彦疏に引く『楽緯』の「帝饗の楽を六英と曰ふ」と黄帝の楽「雲門」と絡めたことばであろうか。○撮壤崇山 土をつまんできて、山を高くする意。「撮」は、ひとつまみ。『説文解字』に「二指もて撮むなり」、『漢書』律歴志上「不失圭撮」応劭注に「撮は、三指もて之を撮むなり」という。「壤」は、土。『礼記』中庸に「今夫れ地は、一撮土の多きなり」、『抱朴子』外篇名実篇に「撮壤 決河を填むる能はず、升水 原火を殄つ能はず」とある。「崇山」は、山を高くする意。『文選』卷四七陸機「漢高祖功臣頌」に「海を弘くする者は川、山を崇くするは惟れ壤」とある。○導涓宗海 小川を海に向かって流し込む。「涓」は、小さな流れ。『説文解字』に「涓は、小流なり」という。「宗海」は、川が海に向かつて流れ込む意。『尚書』禹貢に「江漢 海に朝宗す」とあり、孔安国伝に「二水 此の州を経て海に入る。朝するに似たる有り。百川 海を以て宗と為す。宗は尊なり」という。正義にも、小さな川が大きな海に注ぐのが、諸侯が天子に帰するのに似ているので、人事に仮託して「朝宗」といったとする。この二句は、『管子』形勢解の「海は水を辞せず、故に能く其の大を成す。山は土石を辞せず、故に能く其の高きを成す」を典拠とし、『文選』にも、先に挙げた卷四七陸機「漢高祖功臣頌」の他に、卷三九李斯「上書秦始皇」の「太山 土壤を譲らず、故に能く其の大を成す。河海 細流を挾はず、故に能く其の深きを就す」、卷二七魏武帝「短歌行」の「山は高きを厭はず、海は深きを厭はず」、卷三七曹植「求通親親表」の「江海其の大を称するは、容れざる無きを以てなり」、卷一九張華「勵志詩」の「山は塵を譲らず、川は盈を辞せず」などの表現が見られる。李善は、これら従来の何でも受け入れる山や海の偉大さを称える表現に、「孰可」を付して変化を付け、最早何も加えるものがない高宗の偉大さを絶賛している。

第四段は、第一段同様に経書などを典拠とし、或いは、従来の表現に一ひねりを加えて、高宗の徳を称賛している。

五 臣蓬衡叢品、樗散陋姿。汾河委筭①、夙非成誦。崇山墜簡②、未議澄心。握玩斯文、載移涼燠。有欣永日、實昧

通津。故勉十舍之勞、寄三餘之暇③。弋釣書部、願言注緝④、合成六十卷。（①筭、九條本作函、上野氏藏鈔本作

篋。②九條本、上野氏藏鈔本崇作嵩。③上野氏藏鈔本暇作假。④九條本、上野氏藏鈔本、慶安本、全唐文注作註。）

臣は蓬衡の叢しき品にして、樗散の陋しき姿なり。汾河に委まかし筭は、夙に誦を成すに非らず。崇山に墜おちし簡にも、未だ心を澄ましむるを議かたらず。斯の文を握り玩んで、載ち涼燠を移す。日を永くするに欣有るも、実に津を通づるに昧し。故に十舍の勞に勉め、三余の暇に寄せ、書部に弋釣し、注緝せんと願言ねがひ、合せて六十巻と成す。

【注解】○蓬衡叢品 寒門の出身であることをいう。「蓬」は、『礼記』儒行篇に「蓬戸甕牖」とあり、蓬で編んだ粗末な門戸をいう。「衡」は、粗末な家。『毛詩』陳風衡門「衡門の下、以て棲遲すべし」の毛伝に「衡門は、木を横たへて門と為す。淺陋を言ふなり」という。「蓬衡」の用例は見当たらない。「叢品」は、家柄の低いこと。「叢」は、微小の意。『春秋左氏伝』昭公七年「叢爾国」杜預注に「叢は、小貌なり」という。「品」は、等級・品秩をいう。「叢品」も用例が見当たらない。○樗散陋姿 「樗散」は、役に立たないこと。『莊子』逍遙遊篇に「吾に大樹有り、人之を樗と謂ふ。其の大本は擁腫にして繩墨に中らず。其の小枝は巻曲にして規矩に中らず。塗に立つても、匠者顧みず」とあり、人間世篇に、匠石が大木を顧みなかったので弟子が尋ねたところ、「散木なり。以て舟を為くれば則ち沈み、以て棺槨を為れば則ち速やかに腐り、以て器を為くれば則ち速やかに毀たれ、……是れ不材の木なり。用ふべき所無し」と答えたところ。李善は、この二話の「樗」と「散」を合わせて、世の役に立たない意を表現している。杜甫も「鄭十八虔の台州司戸に貶せらるるを送る」詩に「鄭公樗散にして鬢絲と成り、酒後常に老画師と称す」という。「陋姿」は、つまらない資質。曹植の「出婦賦」に「才薄きの陋質を以て、君子の清塵を奉ず」とある。「陋質」と同意。「陋姿」の用例は見当たらない。○汾河委筭、夙非成誦 漢の張安世のように多くの書籍を早くから暗唱はしていなかったという意。『漢書』卷五九張安世伝に「上 河東に行幸し、嘗て書三篋を亡うしなふ。詔して問ふも能く知るもの莫

く、唯だ安世のみ之を識り、具に其の事を作す。後、購求して書を得て以て相校するに、遺失する所無し」とあるのを典拠とする。漢の武帝が、元鼎四年(前一三)に河東に行幸した時に作った「秋風辞」(『文選』卷四五)に、「樓舩を泛べて汾河を濟り」とあるので、行幸の途中、事故があつて書籍を入れた箱三つを汾水に流してしまつたのである。その時、張安世がその書物の内容を全部記憶して、復元できたという話である。「箴」は、衣服や書籍をいれる長方形のはこ。「篋」と同意。「成誦」は、暗唱すること。『文選』卷四〇楊脩「答臨淄侯牋」に「誦を成して心に在り、書を手に借るが若し」とある。○崇山墜簡、未讀澄心 嵩山の下竹簡に対して心を尽くして考えたことがないという意で、自分にはその竹簡をも読解した晋の束皙のような博識はないことをいう。『文選』卷三八任昉「為蕭揚州薦士表」の「豈直に鼯鼠に必ず対するの弁有り、竹書に落簡の謬り無きのみならんや」の李善注に引く『文士伝』に「人に嵩山の下にて竹簡一枚を得しもの有り、兩行の科斗の書なり。人能く識るもの莫し。張華以て束皙に問ふ。皙曰く、此れ明帝の顯節陵の策文なりと。驗校するに果たして然り。朝廷の士庶皆其の博識に服す」とあるのを典拠とする。なお、この話は、『晋書』束皙伝にも見え、『蒙求』にも「束皙竹簡」として取られている。「崇」は、「嵩」と同じで、「嵩山」は、河南省登封県にある山で五岳の一つ。「澄心」は、『文選』卷一七陸機「文賦」に「澄心を鑿して以て思ひを凝らし、衆慮を眇かにして言を為す」とあるところから、心を澄まして考えを尽くすという意とした。

○握玩斯文 『文選』を手にとって読むこと。「握玩」は、『文選』卷四一陳琳「為曹洪与魏文帝書」に「之を読んで喜び笑ひ、把り玩しみて厭くこと無し」とある。「把玩」と同じ。「斯文」は、『論語』子罕篇の「天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後死の者、斯の文に与かることを得ざるなり」に見えることばであるが、ここでは、『文選』を指している。○載移涼燠 年月が経過したことをいう。「涼燠」は、寒暑の意。『南齊書』卷一一樂志の謝朓「雩祭歌辞」の「歌黃帝」に「涼燠 成化を資け、群方 厚德を載す」とある。○有欣永日 『文選』を読んでいると一日を長く過ごせる喜びがある。「永日」は、楽しんで一日を長く過ごすことをいう。『毛詩』唐風山有樞に「子に酒食あり、何

ぞ日びに瑟を鼓せざる。且つは以て喜樂し、且つは以て日を永くせん」とあり、毛伝に「永は、引なり」という。○
 実味通津 『文選』を縦横に読解するに至っていないという意。「通津」は、四方八方に通じる渡し場の意で、陶淵
 明「詠三良」詩に「冠を弾きて通津に乗り、但だ懼る時の我を遺さんことを」とあり、官途の要路にたとえているが、
 ここでは、『文選』を読解する方法にたとえる。○勉十舎之勞 非才のものがこつこつと努力すること。「十舎」は、
 三十里。「十舎の勞」は、『淮南子』齊俗訓の「夫れ麒麟は千里、一日にして通じ、駑馬は十舎、旬にして亦之に至る」
 を典拠とすることば。用例を見ないので、李善の造語であろう。○寄三余之暇 寸暇を惜しんで努力を重ねること。
 「三余の暇」は、『三國志』魏志卷一三王肅伝裴松之注引『魏略』にある、「董遇言ふ、讀書百遍にして、義自づから
 見はると。従ひ学ぶ者云ふ、渴して日無きに苦しむと。遇言ふ、当に三余を以てすべしと。或ひと三余の意を問ふ。
 遇言ふ、冬は歳の余。夜は日の余。陰雨は時の余なり」と。という話を典拠とすることは、『文選』卷三六任昉「天監
 三年策秀才文」に「聴覽の暇には、三余失ふ靡し」とあり、その李善注にも『魏略』を引く。○弋釣書部 各種の多
 くの書籍を取り上げること。「弋釣」は、鳥を捕ったり、魚を釣ったりすること。『文選』卷四三嵇康「与山巨源絶交
 書」に「草野に弋釣す」とある。「書部」は、書籍の部類をいう。『隋書』經籍志総序に「又東觀及び仁壽閣に於いて
 新書を集め、校書郎班固、傅毅等 典掌す。並びに七略に依りて、書部を為す」とある。○願言注緝 「願言」は、
 ねがう意。「言」は、意味の無い助辞。『毛詩』衛風伯兮の「願言思伯」など『毛詩』に多く見られることば。「注緝」
 は、用例を見ないことばであるが、注を付けてそれを集めてまとめる意であろう。○合成六十卷 『文選』は、もと
 三十巻であったが、李善が注を付けて六十巻とした。

第五段は、李善が非才ながら努力を重ねて『文選』の注釈を作成したことを謙辞をもって述べる。この段の『莊子』
 『漢書』『淮南子』などの典故を踏まえた李善の造語と思われることばは、彼の文才を十分に示している。

六 殺青甫就、輕用上聞。享帝自珍、緘石知謬。敢有塵於廣內、庶無遺於小說。謹詣闕奉進、伏願鴻慈、曲垂照覽。謹言。（上野氏藏鈔本帶作帶。）

殺青 甫^はめて就りて、輕がるしく用て上聞す。帝を享りて自ら珍とし、石を緘^くむは謬^{まち}なるを知る。敢へて広内を塵^{ちり}す有り、庶はくは小説を遺^とす無からんことを。謹んで闕に詣り奉進し、伏して願はくは鴻慈の、曲げて照覽を垂れんことを。謹しみ言^ます。

【注解】○殺青甫就 『文選』の注釈が完成したばかりであること。「殺青」は、もともと竹筒をつくるのに、竹を火で炙り青汁を取って書きやすくし、虫にも食われ難くすること。『後漢書』卷六四吳祐伝「父恢、簡を殺青して以て經書を写さんと欲す」の李賢注に、「殺青は、火を以て簡を炙り汗せしめ、其の青を取りて書き易くす。復た蠹^{むし}まれず。之を殺青と謂ふ。亦汗簡と謂ふ。義は劉向『別錄』に見ゆ」とあり、『太平御覽』卷六〇六引劉向『別錄』に同様のことが記されている。後に転じて、書物を書き終える意に使われる。『芸文類聚』卷五五引梁武帝「撰『孔子正言』竟述懷」詩に「刪次は実沈に起こし、殺青は建西に在り」という。○享帝自珍、緘石知謬 価値の無いつまらない物を私蔵して宝物だと思ふのは間違いだと思ふ。完成した『文選』注を自分だけの宝物として私蔵せず上呈することを謙遜して言う。「享帝自珍」は、価値の無いぼろ帝を自分では宝物のようにすること。『文選』卷五二魏文帝「典論論文」に「里語に曰く、家に弊帝有り、之を千金に享^まると。此れ自ら見ざるの患ひなり」とある。この里語は、李善注に引く『東觀漢記』光武帝紀に見える。「緘石」は、価値の無い石を宝物として大切に保管すること。『文選』卷二二応璩「百一詩」の「宋人遇周客」李善注引『闕子』にある、「宋の愚人が玉に似て非なる燕石を宝として珍重し、周の客人に価値の無いただの石だと言われても、なお大事に蔵した」という話を典故とすることば。『緘石』の用例は見当たらない。なお、清の俞樾が『春在堂隨筆』でこの二句を使っている。○敢有塵於廣内 『文選』注を上呈することによって宮廷の書庫が汚れるという謙辭。「塵」は、汚染の意。「廣内」は、宮廷の書庫の名。

『漢書』芸文志総序の「是に於いて蔵書の策を建じ」の如淳注に引く劉歆『七略』に「外には則ち太常・太史・博士の蔵有り、内には則ち延閣・広内・秘室の府有り」とあり、『芸文類聚』巻五五引梁簡文帝「上昭明太子集別伝等表」に「請ふ之を延閣に備へ、諸を広内に蔵し」という。○庶無遺於小説 取るに足らない書籍でも漏らすことがないように願う。自らの『文選』注を小説にたとえた謙辞。「小説」は、『漢書』芸文志小説家に「小説家者流は、蓋し稗官より出ず。街談巷語、道聽塗説者の造る所なり」と定義されるもので、君子の関わるべきものではない書物とみなされていた。○伏願鴻慈、曲垂照覧 「鴻慈」は、大恩の意。天子のことをいう。『芸文類聚』巻五八引梁元帝「謝宮賜白牙鑱管筆啓」に「豈遠く鴻慈を降し、曲に庸陋に覃まぶに若かんや」とある。「曲垂」は、君主が臣下に行う行為に対する敬辞。庾信「謝趙王賁絲布啓」に「遠く聖慈を降し、曲げて矜賑を垂る」とある。

第六段は、『文選』注を上表することを謙辞をもって述べている。この段の里語や『闕子』を典拠として使うのも李善の博学ぶりを示している。

【訳文】

臣下の李善が申し上げます。私は次のように考えております。天道は宇宙に輝き、太陽や星を光で飾って地上を照らしました。道徳は八方の果てまで行き渡り、山川に付着して林立しました。そして予兆を示す天文自然現象が現れ、美徳を含む正しき道が広まったのです。それは人と調和してよき手本となり、教化完成の根本として遠くまで及びました。

だから伏羲氏の結繩の治以前には、葛天氏の高らかな歌声が流れ、女媧氏が笙簧を作った後には、舜帝の「卿雲歌」の奥妙な詞が輝きを放ちました。節回しの緩急はそれぞれ異なり、日月星辰がそれぞれ異なる軌道を持つように音階も定まっていきました。そして楽器の音色はますますのびやかになり、歌舞もたいへん盛んになりました。楚国の詞人屈原は、はるか昔に美しい文を作り、漢代の才子たちは、長年にわたって美文を彫琢しました。玄論清談は正始

の音として伝わり、個性ある風格は建安の体として伝えられています。陸機は江を渡って北方に行き、洛陽で高雅な詩文を吟詠し、元帝が江東の地に晋王朝を再興すると士人たちは東に移り、詩歌は江東で盛んになりました。

梁王朝に至り、大いなる才能はますます麗しくなりました。昭明太子は、皇太子の地位にいて、天子である父に礼節を尽くしたという評判を得ました。また、太子の宮で学問を講究し、居所に賢人才子を招きいれました。名品を、周秦以降の詩文の林から抜き取り、前世の賢人の詩文の海から汲み取るのは、北方の高い山で、一尺の宝玉の品さだめをし、南方の大河の波間で、一寸の宝珠を捜すようなものです。だから、この一集を撰し、『文選』と名付けました。後輩の俊英の士は、皆それを手本としたのです。

謹んで考えてみますに、陛下は、天下を治め徳を完成され、神智と深謀をもって教えを垂れておられます。偉大なる天に則り至尊の位に居られ、日月星辰の光のごとき恩徳を輝かされ、聞こえることのなかった音が世の変化に応じて現れ、聖天子の六代の古楽が広まっております。この上、誰が土をつまんで山を高くしたり、小川を海に流し込むように、陛下の御徳に何かを加えることができましょうか。

私はみすばらしい家の低い家柄の出身で、世に役立たないつまらぬ資質しか持ち合わせないものです。汾河で失った書籍を全部覚えていた漢の張安世のような強記はなく、嵩山の下にあった竹簡をも読解した晋の束皙のような博識もございません。その私が『文選』を手にとって読み始めてから、かなりの年月が経過しました。『文選』を読んでは一日を長く過ごせる喜びはありましたが、縦横に読解するまでには至っておりませんでした。そこで、駑馬のごとき努力を重ね、寸暇を惜しんで、百家の多数の書籍を取り上げ、注釈書を作りたいと思ひ、合せて六十巻といたしました。

『文選』注の定稿が完成したばかりで、軽率にも上呈いたします。私蔵して自分だけが宝物のように考えるのは間違いだともわかりました。宮中の書庫を汚すことにはなりません、取るに足らない書籍をも遺漏無く収められることを

願っております。謹んで宮中に参内して上呈し、陛下に御覽いただければ幸いに存じます。以上謹んで申し上げます。

以上、注解を通じて述べたように、李善はただの博学ではなく、駢文創作の才も兼ね備えていたことがわかる。更に『文選』の李善注の釈義の文にも駢文が散見する。たとえば、卷四〇楊脩「蒼臨淄侯牋」(集注本卷七九)の「若仲宣之擅漢表、陳氏之跨冀域、徐劉之顯青豫、……」に、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」(『文選』卷三〇)の語を使いながら「仲宣流寓楚壤、故云漢表。孔璋窘身袁氏、故云冀域。偉長淹留高密、故云青。公幹淪飄許京、故云豫。……」と、六字句を作って注釈している。李善の駢文創作の才は、『文選』の注の中でも検討する必要があるが、紙数が尽きたので、これについては稿を改めて論じたい。

注

- 1 趙振鐸氏も「李善有比較高的文学素養、他写的《上文選注表》就是一篇很好的駢文。」(『訓詁学史略』 中州古籍出版社 一九八八年)と評している。
- 2 九条本・上野氏蔵鈔本(作上注表)・明州本・袁本の末尾。尤本・胡刻本の末尾は「頭慶三年九月日上表」に作り、官職名は冒頭に記す。参軍の下、板本は皆「事」字を脱している。今、九条本・上野氏蔵鈔本によって補う。
- 3 『旧唐書』儒学伝・『新唐書』文芸伝は、「頭慶中(六五六一六六一)」と記すのみで特定していない。
- 4 中華文化要籍導読叢書『文選導読』 巴蜀書社 一九九三年。
- 5 高步瀛『文選李注義疏』、駱鴻凱『文選学』源流第三(節録高氏注)、張搗之・顧偉列注釈人孫望・郁賢皓主編『唐代文選』(下) 江蘇古籍出版社 一九九四年Vの注釈を参照した。
- 6 『文選』注に見られる釈義の注については、『新唐書』文芸伝に記載されている逸話から、李邕の手になるとする説があるが、これは既に拙論(『文選』李善注小考——李善の『文選』解釈)『学大國文』第三五号)で否定した。

关于李善「上文选注表」

富 永 一 登

对于李善『文选』注的评价似乎无须赘言。但据『新唐书』文艺传中「淹贯古今，不能属辞。故人号书簏。」的记载，为李善其人的文学创作才能所予的评价却未必见高。

『文选李注义疏』中，高步瀛为李善的「上文选注表」作注，说：“至新传书簏之号，殊不足信。善文不多见，即以此表观之，闳括瑰丽，较之四杰·崔·李诸家，殊无愧色。则所谓不能属辞者，殊不待辨。”既批判了『新唐书』的记载，且又指出了李善的文才很高。可是，时至今日对于该表，似乎尚未出现令人称道的释义。

据此，本文试对「上文选注表」作一译注，冀以究明李善骈文创作之文才。